
 学 会 記 事

第 246 回新潟外科集談会

日 時 平成10年 5 月 9 日 (土)
午後 1 時 30 分 ~ 午後 4 時 40 分
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館
2 階大会議室

I. 一 般 演 題

 1) Immediate Breast Reconstruction Using
extended Latissimus Dorsi Muscle Flap
Following Subcutaneous Mastectomy
— 第 33 回ヨーロッパ外科研究会議より —

三浦 宏二 (がん検診クリニック 三浦外科)
川合 千尋 (消化器科・外科 川合クリニック)

1) 一期的乳房再建術は、患者の精神的、肉体的負担が少ない点、手技的にも容易である点、従来いわれてきたように局所再発の follow を妨げることもないことは今日明らかである点、などから、患者、外科医双方にとって二期的乳房再建術よりも優れている。

2) 80%前後を占める皮膚浸潤のない stage I, II 乳癌では、Subcutaneous Mastectomy と Radical mastectomy で局所再発に差がないことから、一期的乳房再建に有利な Subcutaneous Mastectomy を選択できる。

3) Subcutaneous Mastectomy 後のポケットに入れる組織として、広背筋弁がもつとも適していると考えられる。なぜなら、腹直筋弁よりも容易かつ安全 (合併症が少ない) であり、美的には明かに implant よりも優れているからである。腸骨上部の皮下脂肪を筋弁と同時に採取することにより、乳房の比較的小さい日本の婦人では、再建乳房の volume が不足することはまずない。

4) 残念ながら、日本では乳房再建ができる形成外科医が非常に少ないために、乳房温存の適応にならない症例にはほとんど modified radical mastectomy が行われている。しかし、この術式は一般外科医でも容易かつ安全にできて美容的効果が大きい。したがって、どの病院でもできる。

(結論)

Subcutaneous Mastectomy と皮下脂肪を加えた広背筋弁による一期的乳房再建術は、一般外科医が行っても十分な美容的効果が得られる術式であり、乳房温存術の適応にならない stage I, II の乳癌患者に大きな恩恵をもたらす。

2) 女性化乳房に合併した男性乳癌の 1 例

若井 俊文・鈴木 聡
齊藤 博・小林 隆 (新潟市立荘内病院)
金田 聡・三科 武 (外科)

女性化乳房症の経過観察中に、乳癌の発生をみた 1 例を経験したので報告する。症例は 86 歳、男性。前立腺肥大症治療薬酢酸クロルマジノン (黄体ホルモン) を 27 年間服用していたが、89 年 4 月に女性化乳房が出現。98 年 1 月には右乳腺 CD 領域に径 2 cm, 弾性硬の腫瘤が認められた。乳腺腫瘤の吸引細胞診は class IV であったが、臨床的に乳癌を強く疑い、2 月 13 日手術 (Br+Ax) を施行した。組織学的には、f, t2 (25×21mm), n0, 浸潤性充実性腺管癌で、また ER, PR は陽性。免疫組織学的には、p53 は陰性で、PCNA の標識率は 1% であり、低悪性度の腫瘍と考えられた。

男性乳癌は比較的稀な疾患で、女性化乳房症の合併頻度は約 7% であるが、黄体ホルモン剤が原因と思われる女性化乳房からの発生は極めて稀である。高齢男性に女性化乳房がある時は、乳癌の合併を念頭におき注意深い経過観察による乳癌の早期発見・治療に努めなければならない。

3) 外鼠径ヘルニアと術前診断された鼠径部脂肪腫の一例

北見 智恵・神田 達夫
金子 耕司・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
亀山 仁史・曾川 正和
諸 久永 (同 第二外科)

症例は 66 歳の男性。一年半前より右鼠径部の膨隆を自覚。他覚的には 4×3 cm 大の柔らかな還納性腫瘤であった。外鼠径ヘルニアと診断され、併存する腹部大動脈瘤と同時手術となった。精索内に薄い線維性被膜に包まれた脂肪腫を認めた。腫瘍は深鼠径輪を通り腹膜前脂肪層に存在していたが、腹腔内へは続いていなかった。腫瘍を切除し (13×9 cm, 100 g)、鼠径管後壁の補強を行っ